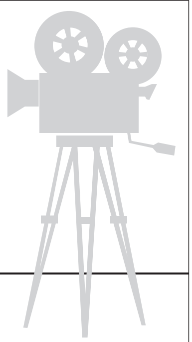
附録

『クーカム』(メナムの残照)映画・テレビドラマ版の特徴

1973年から2007年



平松 秀樹

資料として、『クーカム』の映画・テレビドラマ版の特徴を述べておきたい。

映画化は4回(1973、1988、1995、2013)、テレビドラマ化は6回(1970、1972、1978、1990、2004、2013)されており、ミュージカル化(2004、再演2007)もなされている。

1970年代にテレビ版3本と映画が1本と多く製作されているものの、一世を風靡したほどの形跡はみられず(最初のテレビ版では、のちに副首相も務め避妊具キャンペーンでも有名なミーチャイがコボリ役を演じている)、同じように小説が原作で映画化・テレビドラマ化された悲恋物語の『古傷』(プレー・カオ)のほうがより記憶されていたようである。『クーカム』人気を決定的にしたのは1988年の国際女優のチンタラー主演の映画と1990年の国民的歌手のトンチャイ主演のテレビドラマである。とりわけトンチャイ版は絶大な評判であった。1970年、1972年、1978年のテレビドラマ版は未見のため、以下ではそれ以外について触れたい。

■映画

1973年版……訳者の西野順治郎が観て翻訳を思い立った。全体的にあっさりしすぎの構成で、さほど話題にならなかったか。コボリを演じる男性は、青年という感じではなくビジュアル的にもう一つなのも関係しているか。日本の場面で父母が実の息子を「コボリ」と苗字で呼ぶシーンはどうしても違和感が残る。色白の女性がヒデコ役でその点は原作に近い。新婦の日本式とは思えない奇妙な結婚衣装が印象的である。「サヨナラ」という言葉を原作以上に連発するのは、当時のタイ社会で共有される日本語のレパートリーがまだそれほどなかったためか。アンの父は上流階級の家庭のはずだが、床の上の茣蓙で食事をしているのも特徴的。原作にはない複数の日本兵がアンスマーリンをレイプ未遂する場面も描かれている。

1988年版……前年の『グッドモーニング、ベトナム』に出演した国際的女優チンタラー・スカパットが主演。タイ映画史上ペッチャラー・チャオワラートと並んで評価が最も高い女優であり、演技派でもある。気が強く芯がしっかりしたアンを演じるのはチンタラーが適役であろう。正義感が強く周りの心配も顧みず突っ走る姿は映画『クラスメイト』でも当たり役。アンの家の壁に奇妙な日本語の文字が貼られており、時代性を感じさせる。スタッフにチェックする人はいなかったか。ちなみにタイでの日本語教育の普及は1980以降である。日本でも東京国際映画祭(1989年)などで上映され、VHSも発売されている。戦闘シーンにダース・ベイダーの音楽がさりげなく使われている。

1995年版……国民的歌手兼俳優のトンチャイ・メッキンタイがテレビ版に続いて主演。アンスマーリンが色黒で不評。コボリの演技もテレビドラマ版の新鮮さが薄れ、少々くどい。軍医を始め、脇を固める日本人役に多くの現地在住の日本人が出演しているが、みな台詞が棒読みなのが気になる。実はコボリには日本に婚約者がいたとの独自の設定は注目に値する。

2013年版……旬の俳優であるナデート・クギミヤ(養父が日本人。日本人の血は流れていない)が主演。アンスマーリン役の女優がほぼ素人で演技不足で不評。ロマンティックコメディ全盛の映画界の影響を受けてか、コミカルな場面も多い。従来の映画バージョンでの重々しさは一掃され、最初のオープニングから軽やかな雰囲気を漂わせている。会話等も軽快な調子で進む。感動をよぶ場面でアンジェラ・アキの「手

紙――拝啓　十五の君へ」が挿入歌として流され、評価は分かれるものの、うまく雰囲気を演出しているとした意見も多い。日タイ親善のための主人公の結婚式が複数のカップルの合同結婚式といった演出が異色。鳴り物入りの宣伝であったものの、歴代の興行収入記録を一新したタイ映画史に残る作品『愛しのゴースト』がほぼ同期間上映であったため、映画館での上映の際は完全に話題をさらわれた。

■テレビドラマ

1990年版（ch7）……トンチャイとカモンチャノックのコンビが大人気を博す。メロドラマを得意とするch7の面目躍如か。以降すべての『クーカム』作品の代表作として君臨する。オープニング曲も哀愁に満ちた調子で、全体に重々しい基調。最後にコボリが爆撃で負傷してから死ぬまでのシーンが長丁場で、いよいよ死ぬ日は新聞の一面に「コーボーリ・ターイネー・クーンニー」（コボリは今夜確実に死す）との紹介記事が載る［タイラット紙1990年６月９日］ほどの社会現象を起こした。原作のコボリは日焼けする前は色白で、違和感は残るものの、トンチャイの圧倒的存在感がそんな些末な差異を軽く払拭している。

2004年版（ch3）……演技派でシャイな雰囲気も持ち合わせる主演ソンラームは原作に一番近いコボリだと感じさせ、やさしくハンサムで謙虚さも兼ね備えた男性を演じている。ドークマイソット小説の主人公をも髣髴させるコボリ役で、『百中の一』の主人公アッタカターの再来のような雰囲気でもある。1988年映画主演のチンタラーが本作では母親役で出演し、存在感あふれる演技をしている。

2013年版（ch5）……コボリ役のビーもアンスマーリン役のヌーナーも演技がちぐはぐで、評判のわりには見続けた人は少ない。日本での反応の方が芳しかったくらいである。両者とも歌がうまく、ミュージカル版にしたらよかったのかもしれない。主演のビーは日本を舞台にしたミュージカル『絵の裏』でアメリカ進出を果たしている。

ミュージカル……現在タイ在住の日本人の大関正義（タイでの呼称はセキ・オーゼキ）がコボリ役。冒頭のアンスマーリンとワナットが木陰で５年後の再会を約束するシーンが七夕の夜という創意がみられた。